大石先生とお別れして十二年が経ちました。今年五月十日には、先生の御自宅で十三回忌の法要が営まれます。

今、私があるのは、先生のお陰でありますし、長仁寺が今日あるのも、先生のお陰であります。お姿は見えずとも、先生はいつも私の中に居て下さり、護って下さっております。

先生にお育ていただいたのは、四十代から五十代の前半でした。私は何もわかっていなかったのですが、ただ、先生から発せられるお浄土のお徳に包まれて、心に光を頂いて幸福感に満たされていたことを、はっきりおぼえております。まるで親鳥の懐の中で温められている雛鳥のようでした。それは、まるで先生と同じお浄土に生まれたかのような錯覚を起こさせる程、強いものでした。

先生がお浄土へお還りになると、内から外から次々と身に起こるさまざまな悪障に翻弄され、足元がふらつく日々の連続でした。親の手を離れ、自分の足で歩む鍛錬の時が与えられたのでしょう。先生からいただいた教えをともし灯とし、また教えを自分に確かめながらの歩みが始まりました。歩みなどといえるものではありません。大石先生の教えを聞いたとは言えないような、ぶざまを呈することが何回もありました。いえ、何も聞いてはいなかったことが露呈する日々でした。すべて、先生のお徳に乗せられて、運ばれていただけの私だったのです。はじめから先生はご承知だったのです。先生と自分との距離がどんどん離れて行くように感じていたときもありました。そもそも、先生はとても手の届かないところにいらっしゃったのです。でも、先生はいつも私の傍に居てくださる。本当に不思議な先生です。姿無きあとも、先生はあの手この手で導いて下さっているかのようです。

先生との数多くの思い出で、今思い出されるのは、御法座のたびに、妄念妄想で覆われた私の心が、たちまち清浄にならせていただくという稀有な経験です。そのようなことは、後にも先にも先生おひとりです。たくさんいただいた教えでは、特に「お浄土をもらいなさい」と勧めて下さったお言葉が浮かんでくださいます。お念仏を勧めてくださった大石先生は、まさしく如来様の御化身でありました。善き師というものは、姿無きあとも、ずっとお育て下さっているのです。「お浄土をもらいなさい」の教えは、私がお浄土をいただくまで見捨てない、という仏さまのお心から出てくださっていることに気づいたのは最近のことです。

今は、統合失調症を患う二男のアパートに行き、共に仏書を拝読させていただくことが一番幸せを感じる時です。そこに大石先生もいらっしゃることが感じられ、護られているなと思います。絶望に沈ませないご本願の威徳に、生きる力を頂いております。二男は私以外の誰とも心を開かず、アパートでひとり暮らしをしているのですから、私の責任は重大です。でも、そんなときでも、息子を労わるとか、私が世話をしてやるとか自力心が出ると、ハッと邪見憍慢を知らされます。育てられているのは私の方だと。そのように大石先生から教えていただきました。生きる道を賜りました。

「師仏の教えなかりせば　なんで往けよう光明土」大石法夫先生『光あり』

なむあみだぶつ　なむあみだぶつ　　合掌　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　法喜